

研究・調査報告書

分類番号	報告書番号	担当
A-133	21-027	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学部門 三浦克之
題名 (原題/訳)		
A Systematic Review of Household and Family Alcohol Use and Adolescent Behavioural Outcomes in Low- and Middle-Income Countries 低・中所得国における家庭・家族のアルコール使用と青少年の行動学的アウトカムに関する系統的レビュー		
執筆者		
Jokinen T, Alexander EC, Manikam L, Huq T, Patil P, Benjumea D, Das I, Davidson LL.		
掲載誌		
Child Psychiatry Hum Dev. 2021 Aug;52(4):554-570. doi: 10.1007/s10578-020-01038-w.		
キーワード	PMID	
アルコール、青年期、行動、低・中所得国	8238760	
要旨		
<p>目的：アルコール乱用の曝露は、思春期の神経発達や行動学的アウトカム（薬物使用、精神疾患、問題行動、自殺傾向、10代の妊娠など）に影響を及ぼす有害な幼少期体験と考えられている。この問題に関する研究のほとんどは高所得国を対象としており、低・中所得国（LMICs）では、アルコール摂取パターンや関連する因子が異なる可能性があることから、今回は LMICs での影響に関して系統的レビューを行なった。</p> <p>方法：1990 年から 2020 年にかけて、LMICs を対象として発表されたすべての研究を収集した。10～18 歳を対象とし、アルコールを乱用している家族がいること、世界銀行が定義する低・中所得国であること、思春期の行動や神経発達に与える悪影響のアウトカム指標としていることなどを基準とし、18 の LMICs から 43 の研究、合計 70,609 人の参加者が対象となった。アウトカムの指標は、薬物使用、うつ病/不安症、自殺念慮、問題行動、感情的機能不全、10代の妊娠、自傷行為などとした。</p> <p>結果：結果は不均一で、アルコールの量も十分に定量化されていないが、家庭内のアルコール乱用と思春期の自殺傾向、うつ病、不安、薬物使用、問題行動、10代の妊娠、自傷行為との間には、統計的に有意な関連性がいくつか記述されていた。特に母親と父親のアルコールの乱用は、思春期の行動への悪影響をもたらす重要な危険因子の可能性が指摘された。</p> <p>結論：低・中所得国においても家庭内アルコール乱用の曝露は、思春期の様々な有害な結果と関連していることを示した。これらの結果をもたらすメカニズムは多様であると考えられ、異なる社会経済的・文化的背景の点から、特に長期追跡研究が求められる。</p>		